

紆余曲折 研究者の道を行く



藤本ゆかり

慶應義塾大学理工学部
[223-8522] 横浜市港北区日吉3-14-1
教授, 博士(理学).
専門は免疫調節性分子の生物有機化学.
fujimotoy@chem.keio.ac.jp
<http://www.chem.keio.ac.jp/fujimoto-lab/>

人生を振り返ったときに、学生時代には予想していなかった道を進むことになった、というのはよくある話かもしれない。大学の教員の中には、学生時代から目指した道をそのまま一直線に進んできた方もおられると思うが、私の場合は、研究を仕事にするという最初の志は貫いたが、かなり予想外に大きく曲がりくねった人生を歩むことになった。今の若い世代の参考になるか心許ないが、多少なりとも参考になればと、私の紆余曲折の道を少し紹介してみる。

研究者最初の一步 学生時代、漠然と研究者として仕事をしたいと思い、化学企業に就職することにした。入社した年(平成元年)は、男女雇用機会均等法の施行により、社内の技術職・総合職について、初めて男女が同じ人事・教育制度になった年であった。会社では、医薬関係化合物のプロセス研究と液晶材料の新規化合物スクリーニング研究に各々数年ずつ従事したほか、関連の国家プロジェクトや、NMRによる構造解析の自動化にもかかわった。当時、ちょうど上記法律の施行により、女性の夜間就業の職種制限がなくなり、徹夜のプロセス実験に女性研究者の立ち会いが可能になった時期でもあった。医薬関連化合物のプロセス研究を行った際に、化学工学担当の精鋭チームと徹夜のスケールアップ実験を行った経験は、苦勞の一方で後から振り返ると充実した思い出で、その後の人生の中で先行きが見えない時期に、化学の世界にいれば、またあの頃の仲間と会えるかなという思いが、ずいぶん気持ちを支えてくれた。また、数報の論文と50件以上の特許を出すことができたことも幸いだった。振り返ってみると、若い頃の、最大限の力を出して得た成功体験は重要だと思うとともに、異なる分野の専門家が高度に協力する楽しさに出会った経験でもあった。

NYでの海外生活 会社でさまざまな仕事にかかわり、化学産業の果たす役割や社会を支える研究の仕事を面白く感じていた頃、家族がアメリカ留学することになった。非常に悩んだ結果、それまでの単身赴任生活に終止符を打ち、当時2歳半の子供にとっては初めて、5年ぶりに家族揃って一緒に生活することにした。恩師の楠本正一教授のご推薦もあり、ニューヨーク(NY)の

コロンビア大学・中西香爾教授の研究室で研究を行った。渡米前はあまり楽観的に考えていなかったが、研究に集中できる環境で、予想以上に研究成果を得ることができた。日本でもNYでも子供を保育園に預ける生活は同じだったが(NYのほうが入園の競争率や費用が高かったものの)、気持ちの自由度はかなり大きくなった。滞在したNYは、世界中から多くの人が集まる場所だが、NYの住人は他人に親切な人も多く、随分いろんな場面で助けてもらった。研究室にはさまざまな国の出身者がおり、あるときランチのテーブルで、食事の宗教的制限が話題にのぼった際には、ユダヤ系アメリカ人、イスラエル人、クリスチヤンのヨルダン人、(東)ドイツ人、中国人、日本人で話す機会があった。それぞれ人柄としてはとても良い人達だけれども、あらためて理解し合うことの難しい部分があることを考える機会になった。

最近、海外留学する学生が少し減っているが、やはり、可能であれば海外生活を送るチャンスを得ることをお勧めしたいと思う。いろんな文化や考え方の人に出会ったときに、逆に人間の一番コアの大事な部分は意外と似ていることもあり、人にとって重要なことが見えやすくなるのではないかと考えている。

大学教員生活と単身赴任 米国から帰国後、名大の渡辺芳人教授の研究室を経て、阪大の出身研究室に戻ることにになり、楠本正一教授、深瀬浩一教授にお世話になった。その後、2014年に慶應大で研究室を立ち上げて、生物有機化学の分野で研究を行っているが、慶應大に移り横浜に住むまでは、再度、夫とは大阪-東京の別居生活となった。研究者夫婦の単身赴任率の高さは、なかなか解決が難しそうだが、私自身は、海外生活で考え方が自由になった面と、両親のサポートも得てなんとか乗り切った感がする。家族の各個人のやりたいことをできるだけ優先しながら、各々の幸せ度がそれほど損なわれないよう方法を模索しいろいろなアイデアを考えてマネージメントをする感覚と、予想どおりにいかず再度違うアプローチを試みたりする生活は、少し研究のマネージメントに似ていたようにも思う。